

私の独り言「男脳と女脳」

大阪大学名誉教授

長谷川 晃

要旨：男女の違いを決めているのは染色体である。両親から受け継いだ染色体のうち、23番目の染色体がXXなら女性、XYなら男性になる。しかし体つきが女性（男性）でも胎児の間に脳が男性ホルモン（女性ホルモン）を多く受けると男性的（女性的）な性格を持つことになる。

人間誰もが異性に興味を持ち始める成長期に、相手に対し、一体この女性（或は男性）は何を考えているのだろうと不思議に思う経験をする。どうも相手の思考形態は分からない、男にとり女性は永遠の謎だなどと感じこれを話題にして議論したりする。その後、息子や娘の誕生を見、育てるようになり、何となくその違いが理解できるようになる。一般的には、男性は闘争的であり、論理的であるのに対し、女性は和みがちであり、感情的であると言われている。また、男性は寡黙的であるのに対し、女性はおしゃべりだとも言われる。

私の場合、こうした男女差の問題について米国在住中にアメリカ人達が何度も「日本人は何を考えているのか分からない」とコメントするのが重なり、単に男女間の考え方の違いを超えて、民族間のモノの考え方の相違に発展して行った。

今回は脳の活動の男女差、続いてこの考え方をベースにして民族間の思想形態の違いについて2回に分けて論じてみたいと思っている。

はじめに

アメリカにいた頃、車のラジオで男性コメンテータが「女性達が“Cute”と言うのが私には分からない、小さい人形がCuteというから、小さくて可愛いものがCuteかと思っていたら、象でも馬でもCute!と言うではないか」と言っていたことがある。確かに日本でも女の子達がハゲちゃんや髭ムシャの男を「可愛い!」と叫んでいるのを目にする。女性の持つこうした基準は男性には理解できない。男性の場合、可愛いというのは「可愛らしい」という一つの基準を持つ。女の子や赤ちゃん、子犬や子猫がその範疇に入る。し

かし、女性は男性の持つ基準からはみ出たものでも「かわいいー」のだ。しかもこの感覚は人種を超えている。人種を超えて女脳は共通した判断能力を持ち、これは人種を超えて共通して男性には不可解である。この事実を興味深く語っているのがあるオーストラリア人夫婦、Allan and Barbara Peaseの書いた「話を聞かない男、地図が読めない女」という書物である〔主婦の友社（2004）〕。

地図の読めない女性と人の話を聞かない男性、これは正に日本人にも通用する。実際、女性が地図を読めないのは女性を助手席に乗せて運転した経験のある男性が何時も感じることである。私なども、地図を家内に始めから渡してあるのに、目的地に近づいて来て「どこを曲がるの」と聞くと、やたらと地図を逆さにしたり戻したりして一向に要領を得ない。こちらは地図をちらちらと横目に見ているだけなのに、先に判断できる。こちらが分からない時は、必ず家内も分からず、役に立たない。Allan達の本では、ワイフに地図を渡して運転するのは喧嘩のもとだから絶対にしてはならないと書いている。

人の話を聞かない男性も日本人と共通する。ある話題をこちらから提供して話しかけると必ず話の腰を折り、無関係な話題を持ち出す。逆に、自説を述べるのを控え、相手に興味ある話題を持ちだすと、こちらの気遣いにも気付かず、得たりとばかり勝手なことをしゃべりまくる。たまに黙ってこちらの話を聞いているなと思ったら、他のことを考えていて何も聴いていない。思うにこうした男性の習性はその防御本能から来ているのであろう。攻撃的な男性の本能の逆で、攻撃されたときに防御法として、攻撃こそ最大の防御とばかりに吹雪のように言葉を浴びせかけるのではないか？（英語で、このことをsnowという言葉で表現する。例えば、“Don't snow me”と言えば、吹雪のように言葉を浴びせないでくれ、あるいは僕を圧倒しないでくれ、という意味だ）。また、自説に固守して人の言うことに耳を貸さない人のことを、“opinionated”と言う。いずれも男性に対してよく使われる言葉だ。

私の経験では、理事や役員と呼ばれている人たちにはこういう男性が多い。そうした地位を獲得するにはこうした特徴を必要とするのだろう。しかしこういう人たちは本当のトップにはなっていないようだ。トップの人は結構、人の話をよく聴く。余裕ができるからなのだろう。

一体こうした男女差、性差と呼ばれているものはどこからくるのだろう、そして性差の根源はどこにあるのだろう。今回はこの問題を取り上げてみたい。

1. Allan-Barbara 説

この著者達は、男女の脳の働きの違いを面白おかしく現象論的に、また生理学的に記述している。その内容は多くの点で、人種や慣習を超えて共通するものを持っている。読者の中には既にこの本をご存知の方も多だろうが、話の順序としてこの節では、この著者達の主張を要約して紹介しよう。

<目の構造の違い>

この著者達は男女差の生理学的な違いとして、染色体の違いからくる目の構造の違いを論じている。周知の通り、目は脳の一部が顔の表面に出て来たものと考えられている。眼球の奥の網膜には白と黒に反応する1億3千万個の桿状体細胞と色を識別する7百万個の錐状体細胞を持つ。ところが錐状体細胞のほとんどはX染色体で女性はこれが二つ、男性は一つしかないので女性の方が微妙な色を識別する能力を持つと言う。実際色盲は男性に現れ、女性は遺伝子は持つが、表には現れてこない。目の感覚が鋭いのは人間の女性だけではない。鳥などもクジャクの例のようにオスが派手な色の羽を持つのは、色彩感覚が優れているメスを引きつける為であろう。一方、人間の女性が美しい着物や装飾品を身にまとうのは色彩感覚の鈍い男性を引きつける為ではなく、自己満足と同性の女性に対する優越感の為である。そのことも知らず、こうした品物を女性にプレゼントする男性は滑稽と言わねばなるまい。黒目の持つ色彩感覚が鋭いだけではなく、周辺視野を司る白眼部分も女性の方が大きい。この結果、女性は周りの女性達の衣服や装飾品の微妙な色彩の違いに極めて敏感で即座に判定する。ご自分の化粧に何時間ものかけ望みの色を選ぶ。染色体の違いからくる目の働きの生理学的な違いは、人類の進化に伴う環境の相違も影響を与えることになる。男性は食物となる獲物を追

いかけ回らねばならなかったもので、視野を狭くして真っすぐ遠方を見る訓練をして来た（この説は男性ハンター説と呼ばれる）のに対し、女性は家にいて子育てをしていて、近くのを満遍なく見て来た。この結果、男性は方向感覚が鋭くなったのに対し、女性にはその必要がない代わりに、身近な風景に極めて敏感で、「妻ときたら、私のコートについたブロンドの毛1本を50メートル離れていても見つけるのに、車をバックさせるとどこかにぶつける」といった小言を男性からよく聞くことになる。しかし一方では、交差点での事故は視野全体を見切れない男性運転手の方が多いし、冷蔵庫の中のものを見つけれないのも男性だ。家内とゴルフカートに乗っている時なども、私は前しか見ないのに、彼女は藪の中のボールを目敏く見つけるのが得意で、1ラウンド中に少なくとも半ダースは拾って来る。しかし後述のように、この男性ハンター説は現在では否定されているとリブ学者達（後ほど定義する）は言っているが。

五感の性差は目だけではない。Allan と Barbara は聴覚や触覚にも現れると言う。女性は微妙な音程の違いを敏感に感じ取り、赤ちゃんの鳴き声から彼らが何を訴えているのかを知る。夜、子供の泣き声に微妙に反応するのも母親で、父親は寝たままだ。この結果、女の耳は地獄耳と言われるし、音痴は男子が8倍も多いと言う。

触感も女性の方が鋭い。厚かましい男を面の皮が張っているというのは生理学的にも事実で、男性の皮膚の方が女性より大分厚く、この結果鈍感である。幸いその結果、男性の方が老けにくいという利点もある。女性が男性よりも触れられたいのは、触れることによって相手の気持ちを感じることができるからだ。これも子育てに不可欠な能力である。こうした男性には理解できない優れた五感を持っている為に、男性は女性が第六感を持っていると思う。浮気がばれるのは何時も男性の方だ。

生理学的に男女の違いを決定づける作用をしているのはホルモンである。男性の体つきを決めているのが男性ホルモンのテストステロン、女性の体つきを決めているのが女性ホルモンのエストロゲンである。こうしたホルモンは体つきだけでなく、脳の働きにも大きく関わっていることが知られている。前述の五感の働きの性差は、胎児の間にこれらホルモンの働きで形成

されると考えられている。

ホルモンの結果、脳の生理学的な違いが生まれる例として、Allan-Barbara は UCLA の神経学者の研究結果を引用している。これによると女性の場合、右脳と左脳の連絡を司る脳梁の太さが男性の 1.3 倍あるという。(後述するようにリブ学者はこの事実を否定する)。その上女性ホルモンが脳梁の働きを強めるという。この結果、女性は論理体系を司る左脳と感情を司る右脳の連絡がよく、このためしゃべりながら他のことを考えることができ、女性をおしゃべりにさせると言う。これに対し男性は、左右の脳の連絡が悪く、事故で左脳を損傷するとたちまち言語障害を引き起こすし、しゃべりながらものが考えられないから、あまりしゃべらないようになる。夫が無口になってるのは考え事をしているのだが、しゃべりながら考えることのできる妻は、何か私に不満があるのではないかといらつく。うちの家内なども歯を磨きながら歩き回ったりテレビを見たりしているが、私は歯を磨くときにはおおむね洗面所の鏡の前に立っている。

こうした目と脳の男女の違いは面白い現象を生む。視野が広く、左右の脳の連絡のいい女性はパーティに招かれた時など、部屋に入ると即座にその場の人々の服装や顔立ちを認識でき、後で誰々さんの服装の色と装飾品が合ってなかった、あの人は妊娠しているのではないかなど、男性が全く気付かないことをよく覚えていて話す。実際私など、とうの昔に忘れていた些細なことを、突然親の仇のように恨みがましく言い出され困惑することがしばしばである。どうも女性にはいわゆるピクチャーイメージとしての記憶が鮮明に残っているようである。それでは空間認識において男性は全くかなわないかと言えばそうではない。一つの方向の奥行き方向の認識にかけては男性の方が優れている。特に東西南北を基準としてもものを見つける能力にかけては女性に負けな。その例として NHK の番組で、男女のグループに宝探しをさせるテストをしたのを見たことがある。宝のありかを東西南北を基準にし、その上で距離を指定した道順を示すインストラクションを無作為に選んだ男女のグループに渡して試したところ、8 割の男性が無事宝を見つけたのに対し、女性は 2 割ほどしか見つけられなかった。しかし、インストラクションを東西南北ではなく、大木やビルの形などをベースにしたものにすると 8 割の女性が無事宝の

在処を見つけることができた。この実験結果は Allan-Barbara 説を裏付けている。この結果を別の見方から解析すると、男性が東西南北という絶対座標を参考にすることとは、男性は絶対思想を好む。また女性は、その場の風景を参考にすることというのは、女性は相対思想を好むということになるのではないか。このことについては後ほど再記することにする。Allan と Barbara はこうした男女の五感の働きの生理学的な相違は、人類の誕生にさかのぼる社会環境の相違から来ているという。

2. よく言われる男女の行動パターンの相違

<男性は論理的、女性は感情的>

例外も多かろうが一般にはそう言われている。特に男性が理屈を重ねて論理的に理詰めで女性を打ち負かそうとすると、女性側は途端に切れて泣き出したりする。その途端男性は攻撃から防御に回り、負けてしまうことが多い。この場合女性の感情的な振る舞いは、実は計算ずくめの論理的にクールな戦術なのかもしれない。

<女性はおしゃべり、男性は寡黙>

これは間違いなく正しい。温泉などで堀一つで隔てられている露天風呂で、隣の風呂まで声が聞こえてくるのは常に女風呂の方からだ。決して女性客の方が多い訳ではない。女性は和むのが得意で、他人同士がすぐ友達になる。男性がトイレに行く場合は目的は一つしかないが、そこは女性にとって社交場であり、そこを出る時には友達同士になっている。友人のイタリア人夫妻がうちに遊びに来た時など、奥さんのルイーザさんはどう調べたのか日伊文化センターへ出かけ、10 人くらいのイタリア人を連れて戻って来たことがある。

<男性は闘争的、女性は非闘争的>

男性が闘争的なのは、狩猟に出かけたり、縄張りを守ったりの歴史があるからで、男女とも競争心が強いのは変わらないようだ。ただ、価値観の違いから競争する内容が違うようだ。お互い、つまらないことで競争すると非難する。

<女性は近視眼的、男性は遠視眼的>

男性は遠くを見るのに対し、女性は自分の周囲を見る。これは長い間女性が子育てを担当して来たからだろうから、イクメンが登場して来た現代では男性も近

視眼的になるかもしれない。この延長として男性は長期計画を立てるが、女性はその日暮らしという説もある。

男性は左脳で考え、女性は両脳で考える。男性の場合、左脳に障害を負うと言葉がしゃべれなくなると言われているが、女性の場合はそうでもない。それは女性の場合、左右の脳の結びつきがいいからだと言われている。

3. リブ派の論理

日本に比べ、欧米の方が男女差別の歴史は長く、その度合いもきつい。日本の男女平等は戦後にアメリカからもたらされたと思っている人が多いが、これはとんでもない間違いである。男性優位の思想は欧米の方が遥かに強い。それはユダヤ・キリスト教、回教の影響である。これらの宗教は、同じ一人の神のみが唯一の神であり、キリスト教ではその神は男性である。(回教ではマホメットが天啓を受けたのは天使が神のメッセージを持って来たので、男性神かどうかは定かでない。また、キリストを神と認めないので、男性神と断定するのは問題だが、女性に教育を与えないなど、男性優位な宗教であることは間違いない)。実際聖書の人間誕生の英文を見ると「*God created man in his own image*」となっていて、「男性神が男性を自ずからの姿に似せて作った」とある。日本語の聖書はこの箇所を「神は自ずからの姿に似せて人を作りたまえり」と性別をはっきりさせていないので、このことに気付いている日本人は少ない。Man は人という意味を持つため、「人を作りたまえり」と訳すのは間違いではないが、一方では man つまり男性が「人」の総称であり、woman がそうではないこと自体が問題なのだ。男性一神教つまり一人の神しか信じてはならず、その神が男性であれば、女性は大きなハンディを背負うことになる。その結果、例えばヨーロッパでは才能のある女性は歴史的に魔女として扱われ、何万人の女性が魔女狩りで火あぶりの刑に処せられた。ヨーロッパの歴史で最初に登場する女性は16世紀のジャンヌダルクだが、彼女が文盲だったことは良く知られている。アメリカでのウイメンズリブはこうした背景から生まれたものだ。

アメリカで女性解放運動が起こったとき、彼女ら(リブ派と呼ぶことにする)がまず訴えたのは男女の能力

の差は全くないということだ。能力と言ってもいろんなものがある訳だが、リブ派達は2章で挙げたような行動パターンや思考形態の相違は男女固有の、生まれつきのものでなく、全て後天的なもの、生活環境の違いからくるものだとする。例えば女の子が人形で遊んだり、ままごとをしたり、着飾ったりするのが好きなのは親がそうさせるからだと言う(これを英語で *conditioning* とする)。男の子には車や銃のおもちゃを与え、男らしくするように育てるからだ。結果、彼女達の主張は行き過ぎることもあり、私自身も、それを信じて恥をかいたことがある。例えば、彼女達はこの社会が如何に男性優位に作られているかの例として歴史を表す英語の *history* という語も、*his story* から来ていて、人類の歴史は男性の歴史だとされて来たと言う。しかし、調べてみると、*history* の語源はラテン語の *historia* ということで、この非難は当たっていない。この例に漏れず、リブ派の主張は長きにわたる宗教的ハンディキャップを払いのけるのに必死のあまり、無茶なことを言う。最近の研究では猿の子供達に人形と車の玩具を投げ与えるとほとんどのメス猿は人形をとり、逆にほとんどのオス猿は車をとって遊ぶという報告があるので、人間の子供達も親の *conditioning* で女の子が人形、男の子が車を好むのではあるまい。

アメリカのリブ学者に対し日本のリブ学者は、宗教的ハンディがない分、より科学的に *plausible* な立場を取るようだ。その代表として国際医療福祉大学大学院教授の田中富久子氏の考えを紹介しよう。田中氏の意見では、人間の脳には進化の過程で生まれたは虫類や原始ほ乳類の脳、これを彼女は古い脳と言う、と進化したほ乳類や人間固有の思考形態や論理性を司る新しい脳が存在すると言う。古い脳には性ホルモンの分泌などの機能と肉体的な性差を作り出す機能がある。一方新しい脳は生後の生活環境や教育によって作られ、ここには生理学的な性差は全く存在しないと言う。彼女は古い脳の持つ性差をセックス、新しい脳の持つ性差をジェンダーと呼ぶ。定義からジェンダーは生後の環境によって作られる性差である。この説では、新しい脳と古い脳の違いは観念的なものではなく生理学的に区別でき、古い脳とは辺縁系のうち扁桃体や間脳／視床下部それに脳幹のあたりを指す。一方新しい脳は新皮質と神経細胞同士の連絡を取る役目をする髄質

があり、さらに古皮質の海馬も含むとする。この学派の人たちは、Allan-Barbara 説を否定し、著者らの言う性差は全て古い脳の働きからくるもので、新しい脳にはこうした性差を生む作用はないという。この学派はアメリカのリブ学者達ほど極端なことは言わないが、人間の脳には本能的、生物共通の働きを司る古い脳以外には性差は全く存在しないという立場を取る。彼らは男性ハンター説、女性おしゃべり説、男女の空間的認識の有無、男女の思考形態と左右の脳の使い方の相違と言った説は全く根拠がなく、男性優位学派の想像の賜物だとする。しかし、脳を生理学的に古い脳と新しい脳とに区別する考えも元はアメリカのマックリーンの言い出した説で、この考えにもリブ学者の影響がある可能性は大きい。

4. 私の考え

それではここで私の考えを述べることにする。脳に古い脳と新しい脳という生物学的に区別できるエリアがあるとして、これらがはっきり分離独立しているとは考えにくい。例えば、視覚を司る目は脳の一部と考えられているが、これは定義から古い脳の一部と考えるべきであろう。古い脳である以上生理学的な性差、セックスが存在するはずだ。実際女性には色盲がないし、結果として色彩感覚が優れている、また、白目の部分が大きく視野が広い。こうした性差を持つ目でものを見た場合の人間としての判断や、それに基づく人間的思考形態は新しい脳が担当する訳だが、この新しい脳の働きに、古い脳の視覚情報が全く影響を与えないとは考えられない。同様に聴覚・臭覚・触覚などには古い脳が係わる訳だから、これらの働きには性差が存在する。こうした古い脳が得た情報を基に新しい脳が物事を判断する場合、古い脳と新しい脳の間に情報の伝達機能が存在しないはずはない。したがって新しい脳の人間としての働きに生物学的な性差、つまりセックスが影響するはずである。他の例を挙げると、男女が生理学的に引かれ合うのは古い脳とホルモンの働きである。しかし、男女が人間としてお互いを求め合うときに使う言葉や文字は新しい脳が司る。もし古い脳の情報が新しい脳に來なければ、どうして恋文を書いたり、合コンをしたりできるのか。リブ学派の人たちは動物としての性差は体つきが違うから認めざるを得ないが、考える輩としての人間には性差は存在しない、

あるとすれば、それは全て conditioning によるものと主張したいのだろうが、上記の例を見ればこれには無理があることが分かる。したがって、私は Allan Barbara 説を支持したい。

新しい脳が持つ性差のうち、私が結論として得た基本的な男女間の相違は物事を「絶対的に判断する」(男性)か「相対的に判断する」(女性)かの違いだと思っている。或は絶対的価値判断をする文化を男性文化、相対的価値判断をする文化を女性文化と呼んではどうかと考える。女性が地図が読めないのは東西南北という絶対座標を参考にして位置や目的場所を判断するのが苦手だからで、目に入る建物や景色と言った物体を基準にして相対的に判断する能力は優れている。ユーラシア大陸で中世から近世にかけて男性優位の社会が作られた背景には、男性一神教という絶対基準をベースとした社会規範が基盤となっている。男性社会では絶対基準、原理原則を打ち立て、これを基に善悪の判断をする。こうした社会的規範の中では、女性の立場は基本的に弱くならざるを得ない。白黒以外にいろいろな色があってもいいではないかと思う女性には不利な社会形態であろう。こうした社会形態の下で作られた規範は男性にとり有利なものであり、性差別を合法化してしまう。ユダヤ・キリスト教、そして回教がユーラシア大陸を支配し、その男性一神教が規範とされて来た性差社会に、20 世紀になり初めて男女平等を訴えて登場した女性解放運動が、人間としての男女差は存在しないとする新しい絶対基準を持ち出したのは理解できるが、一方ではこうした絶対基準を掲げること自体が男性思考に翻弄されていることに気付く女性は少ない。

物理学者として、物事を常にその根源に立ち返って考えることに慣れている私が得た結論は新しい脳の性差を端的に表現すると、男性は絶対思想に馴染み、女性は相対思想に馴染むと言うことである。別の言い方をすれば、男性は絶対的な規範をベースに物事を判断しがちであるのに対し、女性はそういう判断の仕方に馴染まないということだ。女性の「可愛い」という言葉には絶対的な定義はない、しかし女性同士ではこれが理解できるのである。

(通信 昭和 32 年卒 34 年修士)